中央アジアにおける仏教寺院の伽藍配置の変遷

岩　井　俊　平※

※龍谷大学龍谷ミュージアム

はじめに
Ⅰ．ガンダーラの仏教寺院
Ⅱ．タリム盆地の仏教寺院
Ⅲ．トハーリスターンの仏教寺院
Ⅳ．チュー川流域の仏教寺院
Ⅴ．伽藍配置の変遷
Ⅵ．二重の壁で囲まれた内陣を持つ回字形祠堂
今後の展望

はじめに

ガンダーラ地域で独自の発展を遂げた仏教は、早ければ前１世紀頃、遅くとも後１世紀には中央アジア方面[1]に伝播していた。すなわち、パミールを北東に越えて新疆のタリム盆地周縁に伝わるとともに、ヒンドゥークシュ山脈を北に越えてトハーリスターン[2]にも伝播したのである。一方で、中央アジアでもう１か所、一時的に仏教の流行を見た地域がある。それが現在のキルギス共和国・チュー川流域で、いくつかの仏教寺院が６～９世紀頃を中心に機能していたものと考えられる。

このように広く中央アジアの仏教を眺めると、タリム盆地の仏教、トハーリスターンの仏教、そしてチュー川流域の仏教、という３種類が存在していたことがわかる[3]（図１）。中でもチュー川流域の仏教寺院址に関しては、その成立過程に不明な点が多く、タリム盆地の仏教とトハーリスターンの仏教がそこにどのように関与したのかが今も問題として残されている。「この問題に最終的解答を出すためにはトハリスタン、チュー河谷、東トルキスタンの３者を徹底的に比較研究する必要がある」という加藤九祚の提起に対して（加藤 1997: 189）、我々はまだ十分な対応ができていないのである。

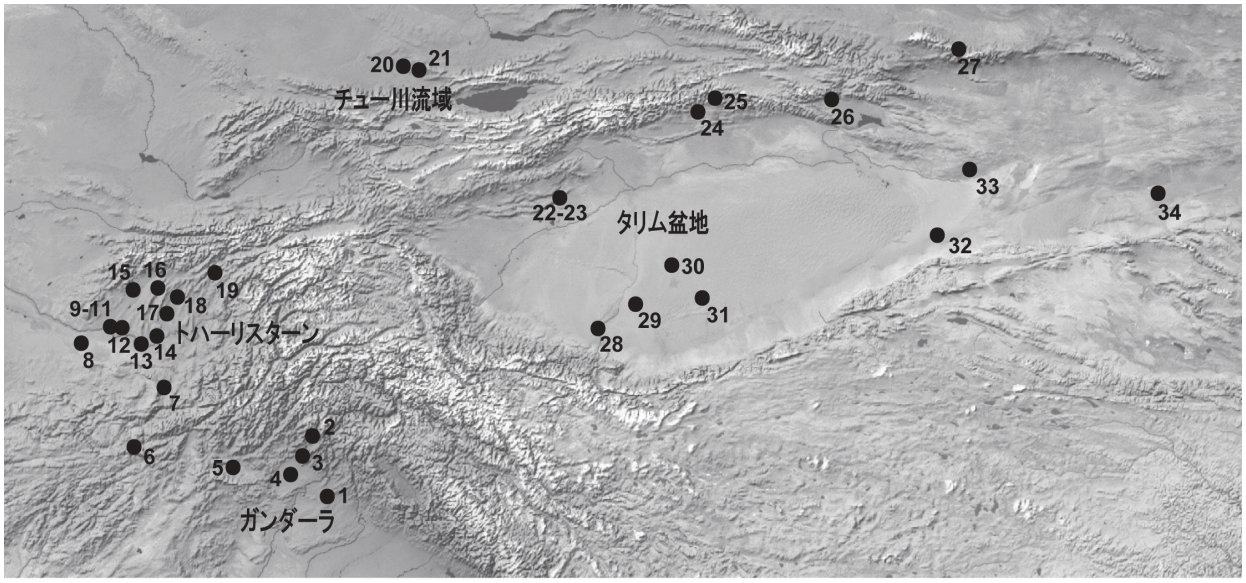
本稿でその解答を用意することは残念ながら難しいが、今後の発掘を含めた現地調査にとって指針となるような、問題点の整理を行っておきたい。そこで取り上げるのは、地域ごとの比較が可能な仏教寺院の空間構成、すなわち伽藍配置である。以下では、中央アジア各地の地上寺院の伽藍配置を確認しながら、キルギスのチュー川流域における仏教寺院の特徴を考察していく[4]。

Ⅰ．ガンダーラの仏教寺院

中央アジアの初期の仏教寺院は、先述のとおりガンダーラ地域からの影響で成立したものであり、その構成要素も多くは共通している。筆者はかつて、広義でのガンダーラ地域（大ガンダーラ）の仏教寺院を中心にトハーリスターンも含めてその伽藍配置を比較したが（岩井 2006）、本稿ではその内容と、K. ベーレントによる一連の研究（Behrendt 2004; 2006）に基づきながら、源流となるガンダーラの典型的な仏教寺院を確認しておきたい（図２）。

まず、寺院の中心を占めるのは釈迦の遺骨・遺灰（舎利）を収めるストゥーパ（仏塔）である。ストゥーパは単独で存在する場合もあるが、周囲にさまざまな建造物が付加されていくことによって、我々が通常イメージするような仏教寺院が形成されていく。すなわち、奉献小塔や祠堂、そして僧房などである。特に大ガンダーラでは、ストゥーパと僧房がセットになっていることがほとんどで、この特徴が各地に引き継がれていくことになる。中でも、中庭を持つ大型の方形僧房は、大ガンダーラのうちインダス川東側のタキシラで発展したもので、２世紀頃に登場したあと、この地域で仏教が継続する８世紀頃まで長く採用された。

祠堂は、小塔や何らかの聖遺物（ガンダーラの場合、釈迦の頭骨や眼球、釈迦が使用した鉢や錫杖と信じられたものが安置されていた）、そして仏像を収める建造物として使用され、単独で設置されるもののほか、ストゥーパの周囲を方形に囲む配置（塔院と呼ばれる）などが発展した。その形状にも、U字形あるいはC字形の単室式や、前室を備えた複室式、後述する二重の壁を持つ「回字形」など、複数



1. タキシラ　2. ブトカラⅠ　3. グンバット　4. タフティ・バーイ
5. ハッダ　6. バーミヤーン　7. スルフ・コータル　8. ディルベルジン・テペ
9. ザール・テパ　10. ファヤズ・テパ　11. カラ・テパ　12. アイルタム
13. ウシュトゥル・ムッロ　14. タフティ・サンギーン　15. ダルヴェルジン・テパ　16. カライ・カフィルニガン
17. カフィル・カラ　18. アジナ・テパ　19. ヒシュト・テパ　20. クラスナヤ・レーチカ
21. アク・ベシム　22. トックズ・サライ　23. トゥムシュク・ターグ　24. ドゥルドゥル・アクル
25. スバシ　26. ミンオイ　27. カラ・ホージャ　28. ラワク
29. ダンダン・ウィリク　30. カラドン　31. ニヤ　32. ミーラン
33. ローラン　34. 敦煌莫高窟

図１．関連地域地図（筆者作成）

存在することが知られている。１世紀頃とされる仏像の登場が、こうした祠堂建築のあり方、引いては寺院の伽藍配置に大きな影響を与えたことは疑いない。

いずれにしろ、ガンダーラの仏教寺院の中心はストゥーパであり、たとえ仏像が登場した後であってもその状況に変化はなかった。

Ⅱ．タリム盆地の仏教寺院

１．４世紀以前の仏教寺院

タリム盆地周辺に関しては、残念ながら１～２世紀に属する寺院遺構が出土していないため、ガンダーラから仏教が伝わった当初の伽藍配置は不明である。この地域で最も古いと考えられる仏教寺院址は、ニヤ（Stein 1907; 中日／日中共同ニヤ遺跡学術調査隊 1999）、ローランおよびミーラン（Stein 1921, vol.1）など、西域南道の各遺跡に存在するいくつかの遺構で、３～４世紀頃とされる。

ニヤでは、ガンダーラとも共通する形態の方形基壇を持つストゥーパが建造され（図３）、その周囲数キロの範囲にいくつかの建物群が分布する。建物群は、二重の壁で囲まれた内陣を持つ方形の回字形祠堂（図４）と、その周囲にある僧房や広間などの建物から成っているが、その中にはストゥーパが存在しない。祠堂の内陣にも、木芯の存在から塑像が祀られていたと考えられる。したがって、これらの建物群は、周辺でもっとも高所に建造されたストゥーパを主要な礼拝対象とし、それが見える場所に配置されている可能性が高い。なお、ニヤから西北西に 100km ほど内陸に入った地点に所在するカラドン遺跡でも、回字形祠堂が発見されている。内陣からは方形基壇の痕跡が発見されており、ストゥーパが安置されていた可能性もあるが、仏像の台座であった可能性も否定できない（Rhie 1999: 318-321; 伊藤 2002）。

図２．タフティ・バーイ中心部の伽藍配置
（Behrendt 2004、Fig. 2 を改変して作成）

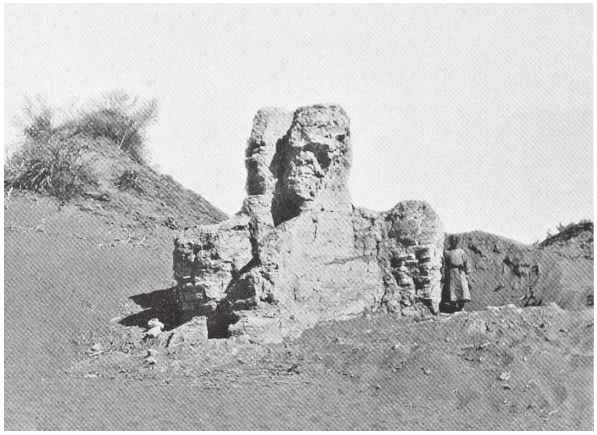


図３．ニヤ遺跡のストゥーパ
（Stein 1907、vol. 1、Fig. 38 より）

ローランでは、スタインが L.A. および L.B. と名付けた地点やその中間に方形基壇のストゥーパ（図５）が建造されており、周辺から見通すことが可能だった。またスタイン自身は、L.B.II 遺構群からストゥーパ形の板状装飾品などが出土していることを根拠に、これが仏教寺院址であると想定している。しかし方形建物の一部が発掘されているだけで、寺院の全体像は不明である。

ミーラン（M）ⅢとⅤは、方形室（スタインによ

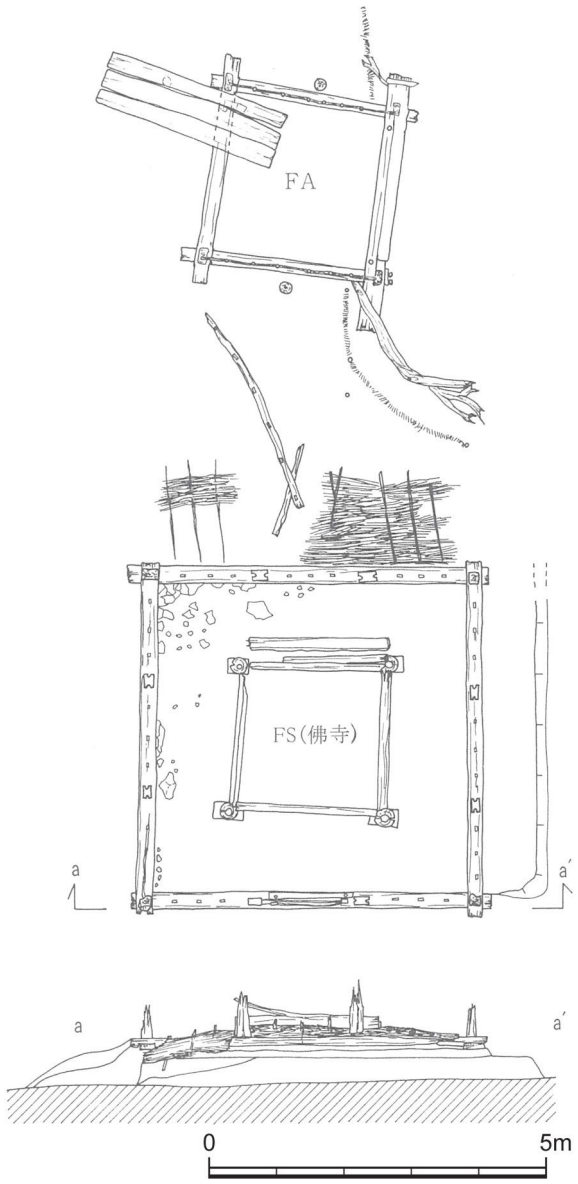


図４．ニヤ遺跡の回字形祠堂（中日／日中共同ニヤ遺跡学術調査隊 1999、第２巻図版十を一部改変）

ればドーム天井が架されていた）の中央に安置された砲弾型のストゥーパ（図６）と、周壁に描かれていたローマ風の壁画で名高い。両建造物は明らかに祠堂で、内部に彫刻の仏像は存在しない（壁画には、ブッダが人間の姿で描かれている）。周囲にはストゥーパの方形基壇と考えられる遺構（M Ⅵ、M Ⅶ）が存在し、僧房の可能性もある建造物の基礎（M Ⅳ、M Ⅸ）も認められる。使用されている日干レンガのサイズからは、これらはすべて同時代であった可能性が高く、ストゥーパを主要な礼拝対象とするガンダーラの伝統がもっともよく残されている。

図５．ローラン遺跡 L.A. の大型ストゥーパ（左奥。手前は住居址）（Stein 1921、vol.1、Fig. 95より）

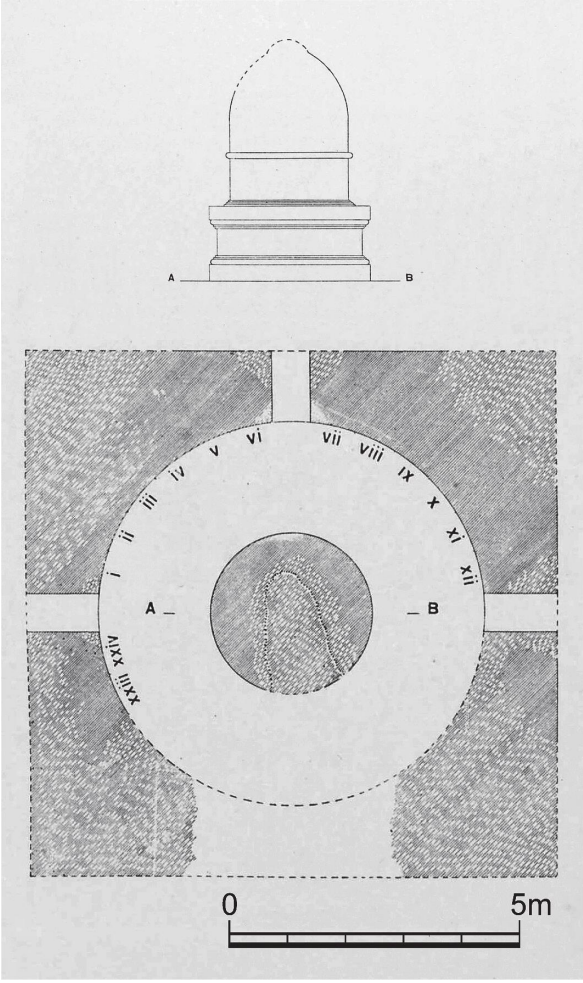


図６．ミーラン M Ⅲの祠堂とストゥーパ
（Stein 1921、vol.3、Plan 32 を改変して作成）

２．５世紀以降の仏教寺院

時代が降る５～８世紀頃の地上寺院については、比較的多くの例がある。西域南道では、ホータンのラワクがよく知られている。平面十字形の基壇を持つ大型ストゥーパとそれを囲む周壁が検出され、その周壁の表面に多数の塑像を取り付けるという他に例を見ない荘厳が行われていた（Stein 1907、vol.2、Plan XL）。しかし残念ながら、ストゥーパ以外の施設は調査されておらず、寺院全体の構成は不明である。

一方、同じホータンに所在するダンダン・ウィリクでは、多くの祠堂とその他の建物群が発見されているにもかかわらず、付近にはストゥーパが存在しない。スタインによれば、遺跡の北方 11km ほどのところに２基のストゥーパの残骸があるとのことで（Stein 1907: 304-306）、こうしたストゥーパを中心としてダンダン・ウィリクのような祠堂群が複数分布している可能性も考えられる。そして、当該遺跡の祠堂の多くが二重の壁で囲まれた内陣を持つ回字形で、その内陣には仏像が祀られていたことが判明している（図７）。遠方に見えるストゥーパを主要な礼拝対象としつつ、身近な祠堂内には仏像を祀るというあり方であったとすれば、先述のニヤ遺跡と共通している[5)]。

また、上述のミーラン遺跡には５世紀頃まで降ると考えられる寺院址（M Ⅱ）も残されている。方

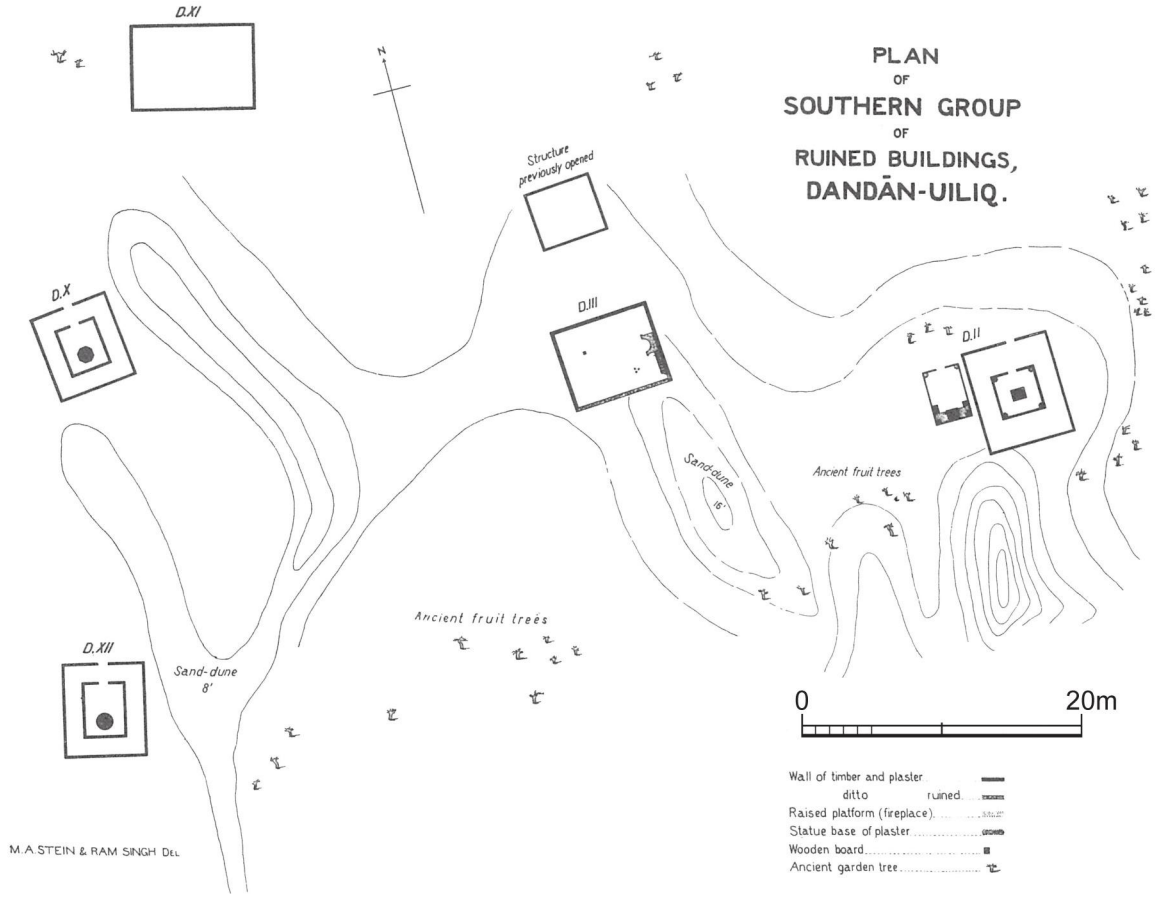


図７．ダンダン・ウィリク遺跡 南グループの遺構分布図（Stein 1907、vol.2、Plan XXV を一部改変）

形基壇を持つストゥーパとそれに隣接する方形建物からなっており、建物内には円形プランの内陣を持つ祠堂が存在している（Stein 1921、vol.3、Plan 31）。そして、基壇の側面や方形建物の外壁外側には、大型の塑像が取り付けられていて、同遺跡のより時代が遡る遺構とは一線を画する。以上のようにミーランにおいては、礼拝対象としての立体の仏像が遅れて登場すること、その一方で主要な礼拝対象が少なくとも５世紀まではストゥーパであり続けていることが示されている。

西域北道の各地でも、複数の地上仏教寺院址が知られている。トゥムシュクのトックズ・サライ（Paul-David et al. 1961-64）では、大型の方形基壇を持つストゥーパ（後世にイスラームの聖廟に改変されている）の周囲を小型祠堂列が囲む、ガンダーラの典型的な「塔院」が形成されている。さらにいくつかのストゥーパおよび祠堂が造られており、その中には二重の壁で囲まれた内陣を持つ回字形祠堂もある（図８）。このタイプの祠堂は、大量に出土した塑像から６～７世紀に位置づけられるため（宮治 1991: 30）、ガンダーラ風の塔院部分はそれよりやや遡る年代が想定されている。なお、トックズ・サライの南東に位置するトゥムシュク・ターグ（Paul-David et al. 1961-64）でも、方形基壇を数段重ねたストゥーパと仏像を安置する単独の祠堂が造られているが、こちらでは回字形祠堂は確認されていない。

クチャのドゥルドゥル・アクル（Hambis（ed.）1967）では、方形基壇のストゥーパ・僧房・祠堂を含む建造物群が稜堡を伴う外壁で囲まれており、その外側にやや離れて、もうひとつの方形基壇ストゥーパがやはり外壁に囲まれて存在している（図９）。建物群の中にはガンダーラ以来の典型的な方形僧房のようなプランも認められるが、それぞれの実際の機能には不明な点も多い。また、祠堂と考えられるいくつかの方形室はいわゆる回字形は採らず、中央にストゥーパまたは仏像用の基壇が設置されているのみである。当然、その周囲を右繞したものと考えられるが、内陣部分をさらに壁で囲む構造ではない点がニヤやダンダン・ウィリク、トックズ・

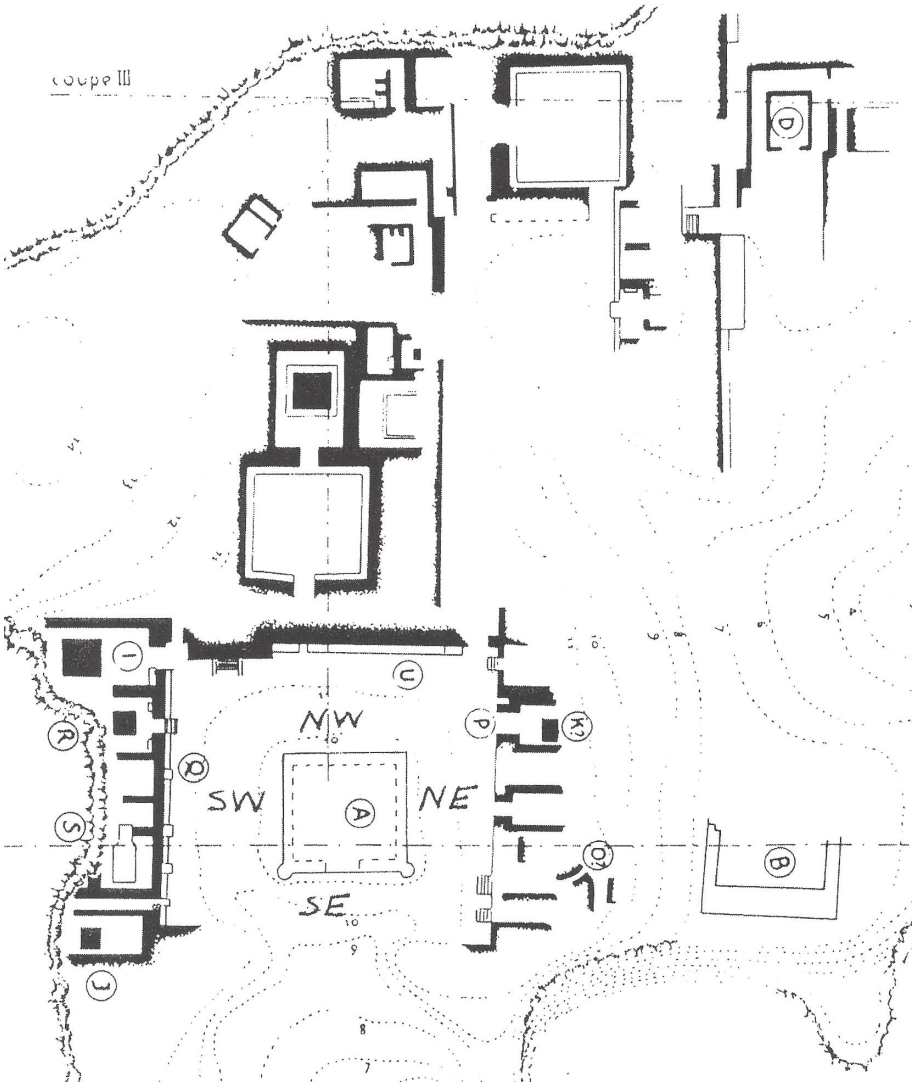


図８．トックズ・サライの伽藍配置（Paul-David et al. 1961-64、vol.1、Plan 2 を一部改変）

サライなどとは異なっている（Rhie 2002: 606）。

同じくクチャのスバシでは、クチャ川を挟んで東西に広大な寺域が展開している（Hambis(ed.) 1967; Rhie 2002: Fig. 4.32; Fig. 4.44a）。東西いずれにも大型の方形基壇ストゥーパが複数存在し、その周囲に多くの建造物が群を形成しつつ散在する。西側の僧院Ｄは、ドゥルドゥル・アクルと同様にストゥーパといくつかの部屋からなら建造物群が稜堡を伴う外壁で囲まれる例で、クチャ地域における共通性が認められる。そして多数あるこれらの建造物群の中には、ドゥルドゥル・アクルと同様、回字形祠堂が見当たらない。

カラシャールのミンオイにおいては、多数の方形室がいくつかのグループを形成しつつ広範囲に分布している（図10）（Rhie 2002）。各グループの中で最大の祠堂は、基本的に二重に壁で囲まれた内陣を持つ回字形で、周囲を回廊がめぐる構造になっている。その他の方形室は、祠堂の場合もあれば僧房として使用されている場合もあるようだが、内部にストゥーパの基壇と思われる遺構を残す例は非常に少ない。周囲に大型のストゥーパがあるわけでもなく、主要な礼拝対象がほぼ仏像に集中していることがうかがわれる[6]。

トルファン周辺でも多くの仏教寺院址が調査されている（ヤルディッツ 1991）。特にカラ・ホージャ（ホッチョ、高昌故城）およびヤールホト（交河故城）の内部には、多様な空間構成の寺院が存在していた。中心となるのは、全体として長方形のプランで、手前に広い中庭があり、壁で区切られた奥側にストゥーパ（方柱状で、最上部に円胴部と伏鉢があ

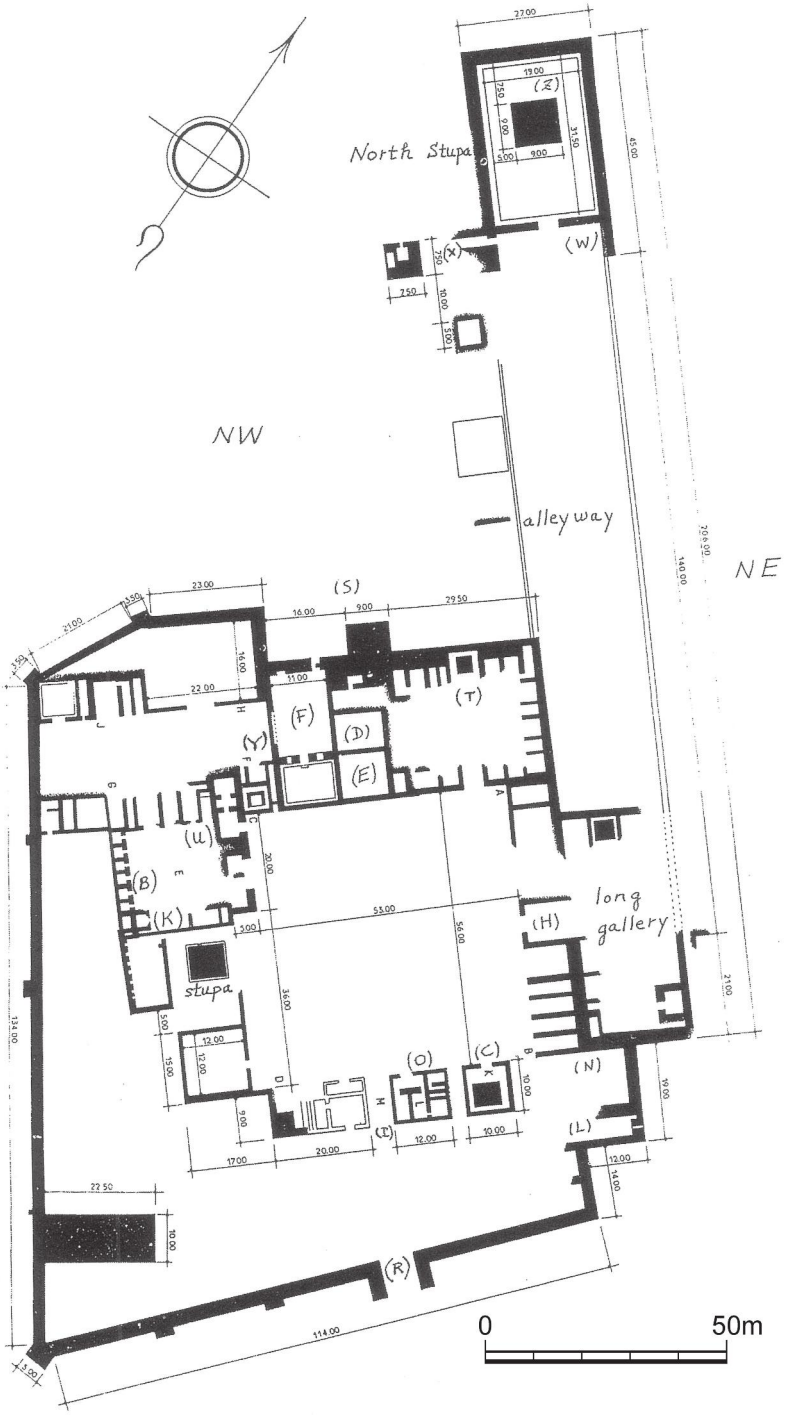


図９．ドゥルドゥル・アクルの伽藍配置（Hambis(ed.) 1967、Plan 1 を一部改変）

る）を設置した構成である（図11）。このストゥーパの周囲には塑像が設置され、さらに壁面にも仏龕を設けて多くの仏像を祀っていたものと考えられる。これとは別に、二重の壁で囲まれた内陣を持つ回字形の祠堂や、インドの五塔形式から影響を受けたと思われる幾何学的な構成を採るストゥーパ群なども知られている。

Ⅲ．トハーリスターンの仏教寺院

１．４世紀以前の仏教寺院

大ガンダーラからこの地に仏教が伝わったのは１世紀頃と考えられ、クシャーン朝期まで遡る仏教遺跡が､特にアム川の北側でいくつか発見されている。

ファヤズ・テパにおいては、ストゥーパと、それ

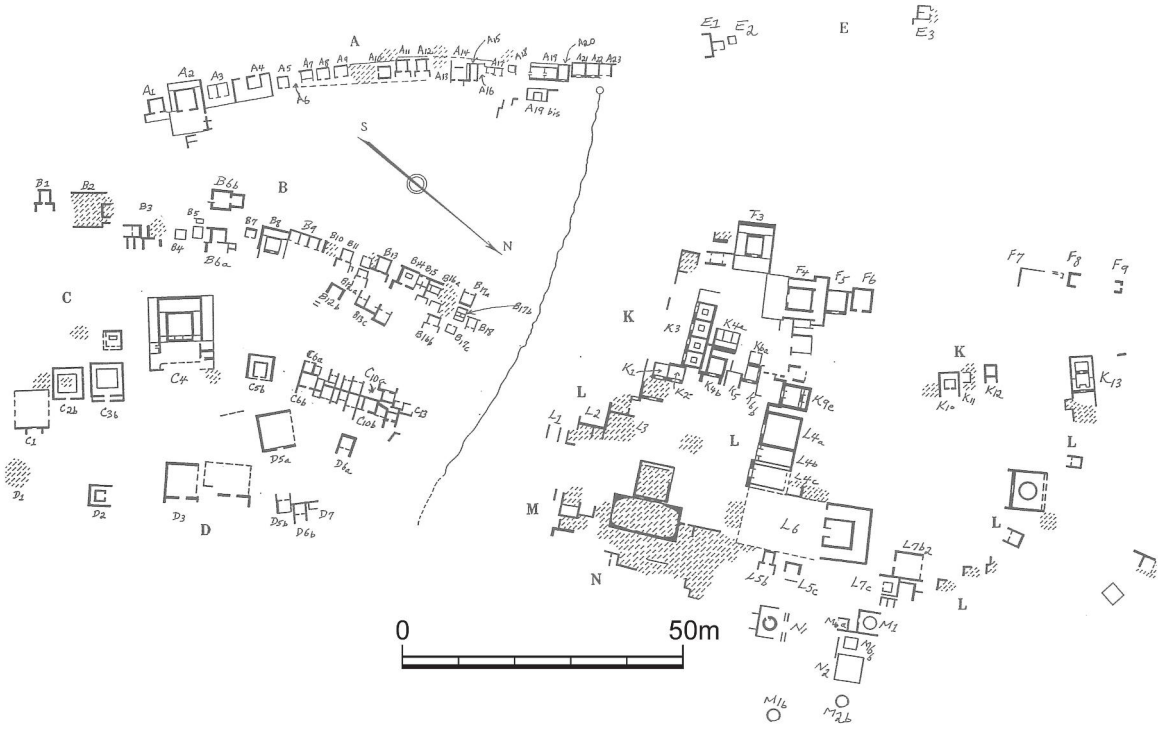


図10. ミンオイ遺跡の遺構分布図（Rhie 2002、Fig. 5.1c を一部改変）

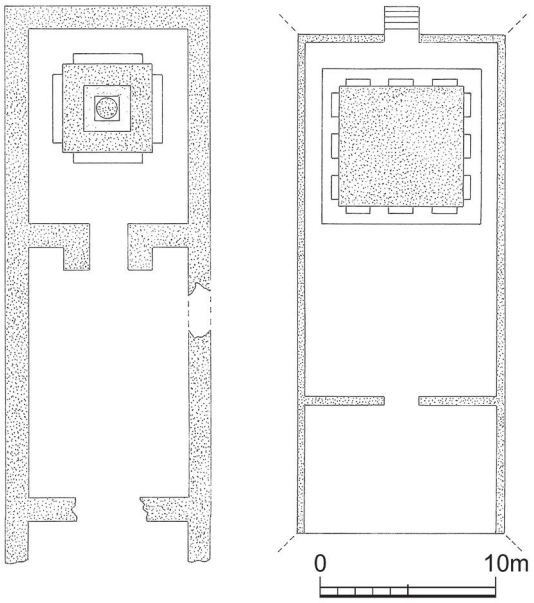


図11. トルファン高昌故城の寺院（左：γ寺院　右：A寺院）（ヤルディッツ 1991、図21・図22 を一部改変）

に隣接する方形僧房が確認されており、1～4世紀に機能していた寺院と考えられる（Fussman 2011; 岩井 2013）。ウシュトゥルムッロも同じ伽藍配置をしていて（加藤 1997）、トハーリスターンの仏教が、当初からガンダーラ地域と共通する伽藍配置を採用していたことを示す好例と言える（図12）。後者の方形僧房の北側中央には、房室よりも大型の方形室があって、その周囲が二重に壁で囲まれた回字形となっている。

カラ・テパ（図13）は、丘の斜面に掘った洞窟と、日干レンガやパフサで構築した屋外の建造物とを組み合わせた寺院（コンプレクスと呼ばれる）が存在していることで知られ、複数のストゥーパおよび僧房が設置されている。これらの一部は、出土土器やそこに記された墨書の書体などからクシャーン朝期に年代づけられており、当該地域における初期の仏教寺院と考えることが可能である。コンプレクスA、B、Dの洞窟部分は、祠堂と思われる中央の方形室とそれを囲う回廊が掘り出されており、このプランがカラ・テパにおいて重要な位置づけであったことを示している。一方で、近年の北丘における調査では、大型ストゥーパおよびそれを囲む小祠堂列と、内庭を持つ方形僧房が接する地上寺院の存在が明らかとなっている。大部分は5世紀以降に建造・改修されたものと考えられるが、大型ストゥーパの内部に小ストゥーパが内包されている点や、新たに発見された壁画にクシャーン朝期に遡る特徴が認められることから（池上編 2017; 2018）、すでに2～3世紀頃には北丘においても寺院が営まれていた可能性がある。コンプレクスだけでなく、このようなガン

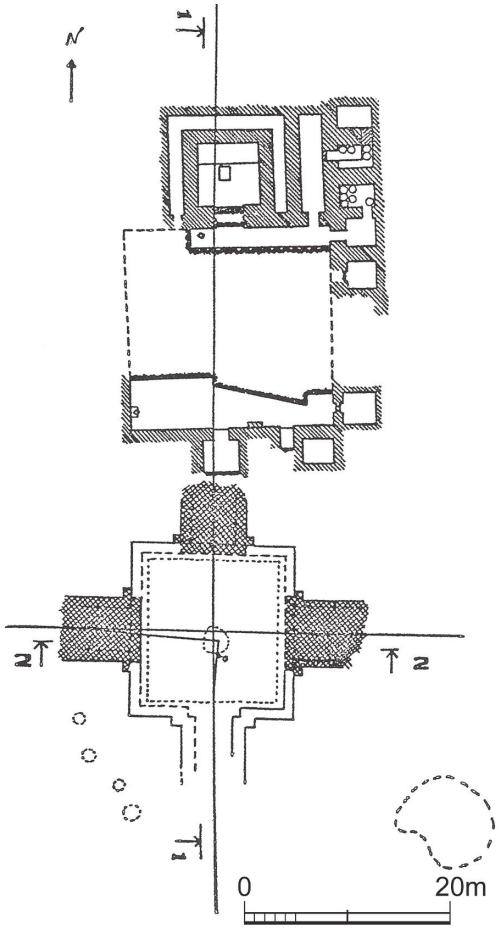


図12. ウシュトゥルムッロの伽藍配置
（加藤 1997、図2-63 を一部改変）

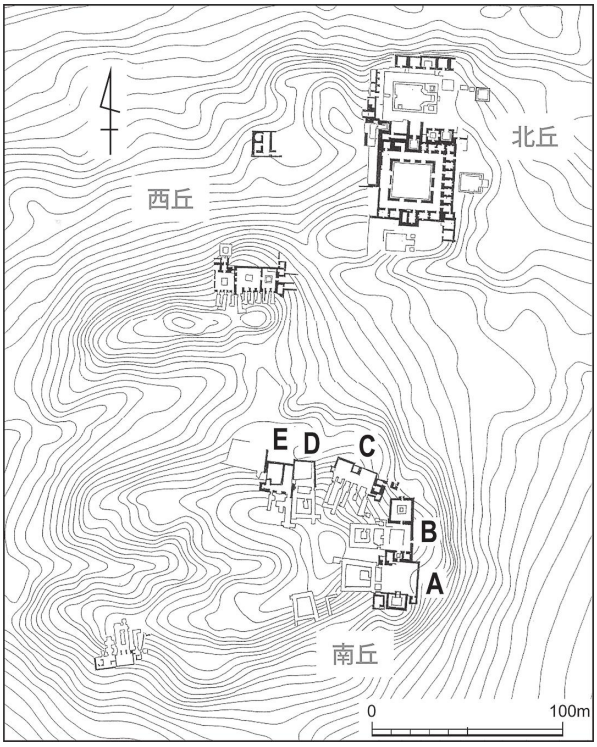


図13. カラ・テパ遺跡の全体図
（池上編 2018、p.13 の図を改変して作成）

ダーラに由来する伽藍配置の寺院がカラ・テパにも存在したことを示す重要な遺構である。

ウシュトゥルムッロとカラ・テパで認められた回字形の祠堂は、アイルタムの仏教寺院址（上層遺構）でも確認されている（図14）。壁に囲まれた前庭があり、奥の回字形祠堂内部からは基壇と傘蓋の破片と思わる出土品が発見されており、ストゥーパが祀られていたと考えて問題ない。祠堂の隣にはより大型のストゥーパがあり、さらに発掘はされていないものの、北側には方形僧房の痕跡が認められることから（Pugachenkava 1991/92: 27）、寺院の全体像が判明する。すなわち、ストゥーパと僧房のセットと合わせ、回字形祠堂が伴う伽藍配置であり、注目に値する。ただし、祠堂内部にはストゥーパが祀られていたことは注意を要する。

ダルヴェルジン・テパの第１仏教寺院址および第２仏教寺院址は、いずれも４世紀後半までには廃絶したと考えられるが（岩井 2013）、どちらも全体が発掘されたわけではないため、伽藍配置の全容は不明である。ただ、前者ではストゥーパの基壇と思われる構造物が出土しているものの、後者においてはそれが発見されていない。このことは、前者が城壁外に所在し、後者が壁内の街の中に所在したことと関係があるかもしれない。ザール・テパにおいても、古い城壁が使用されなくなったあとにその上部に寺院（祠堂？）が建造されているが、そこではストゥーパが発見されておらず、一方で城壁外には内部に舎利室のあるストゥーパが存在していた（ピダエフ 2001）。ただし、ザール・テパにおいても伽藍配置の全貌は判明していない。

２．５世紀以降の仏教寺院

トハーリスターンにおいては、４世紀後半に一時的に仏教が衰退するものの、その後５～６世紀のどこかの段階で再び活性化することが知られている（Ставиский (ред.) 1975; 1996; 岩井 2013）。上述のカラ・テパ北丘の寺院址は、概ねこちらの時代に属する可能性が高く、ウシュトゥルムッロではストゥーパを十字形に改築して寺院としての機能を再興している。いずれも、伽藍配置としては大型の主ストゥーパに方形僧房を伴う形で、ガンダーラ以来の伝統が

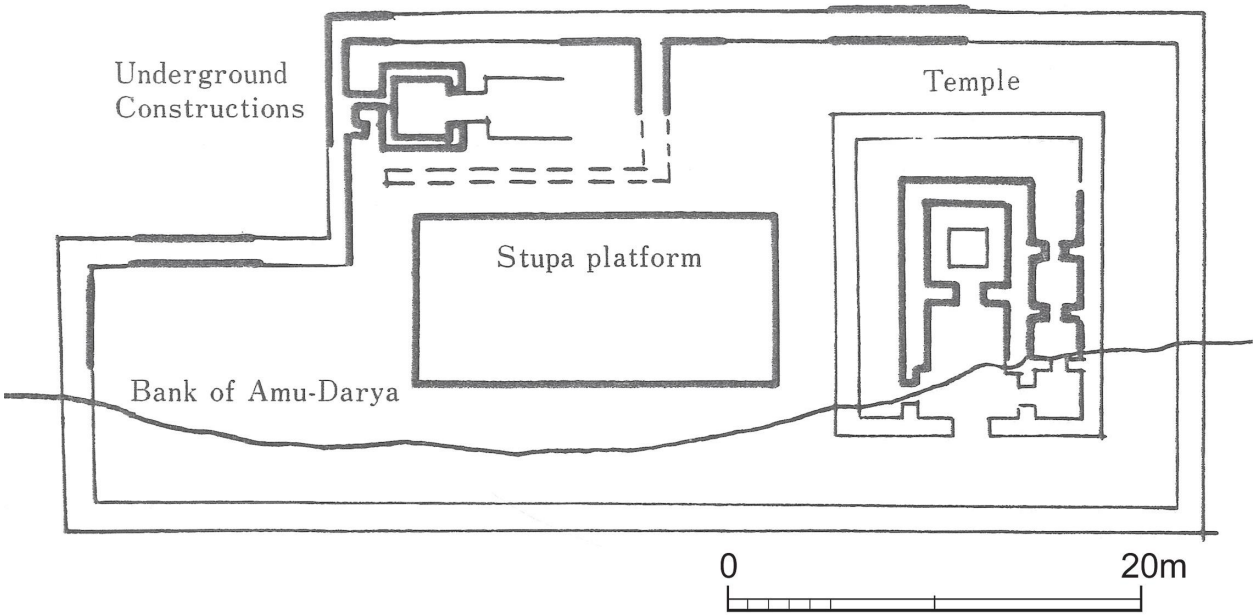


図14．アイルタムの伽藍配置（Pugachenkova 1991/92、Fig. 2を一部改変）

継続している。

この時期を代表する仏教寺院址としては、アジナ・テパが挙げられる（Литвинский и Зеймаль 1971; Litvinskij and Zejmal' 2004）。大型の主ストゥーパとそれを囲む祠堂列によって塔院が形成され、内庭を伴う方形僧房も計画的に一体のものとして配置されており、いわばこのタイプの伽藍配置の完成形とも言える（図15）。さらに塔院部分については、ストゥーパ部分を内陣と見れば、周囲に回廊がめぐる回字形になっている。

一方で、大型のストゥーパを伴わない寺院（あるいは単独の祠堂）もその数を増していくようである。ヒシュト・テパは、十字形の部屋を中心として、その周囲に僧侶のための房室と祠堂列を配する特異なプランの建造物で、建物中央のもっとも奥に二重の壁で囲まれた祠堂があった（図16）（加藤 1997）。部屋の内部には長方形の基壇があり、その形状からストゥーパではなく何らかの尊像の台座であったと考えられる。さらにこの基壇の下からアラブ・サーサーン貨幣やソグド貨幣が出土していることから、7世紀後半以降に機能していたことが明らかである。一方で、この祠堂に向かって左側の方形室の内部には、1辺3.2mほどの平面十字形のストゥーパが安置されており、部屋の四隅には塑像が安置されていた痕跡があった。この配置から考えれば、ヒシュト・テパのもっとも重要な礼拝対象は、中央奥に安置されていたと考えられる尊像である。この建物の周囲に大型ストゥーパの痕跡はなく、僧房と祠堂を一体化させたようなこの建物が寺院の中心ということになる。

カライ・カフィルニガンにおいても、シャフリスタンの中で寺院址が発見されている。この建造物には3つの時期が認められるが、最後の時期（発掘者は7～8世紀と考えている）は確実に仏教寺院であったという。やはり二重の壁で囲まれた祠堂があり、その背後にいくつかの小部屋が配置されている。祠堂の中心には二段の基壇があり、その周囲と部屋の四隅からは彫像の断片が出土していることから、尊像が主要な礼拝対象になっていることが分かる。発掘者は、この祠堂の中心にある基壇が「ストゥーパの役割を果たした」と考えている（加藤 1997: 63）。

カフィル・カラでは、第2期（発掘者は6～7世紀とするが、もう少し遅い可能性もある）に属する仏堂が発見されている。チタデルの内部にあり、二重の壁に囲まれた回字形祠堂の室内と回廊から、壁画断片が出土している（Литвинский и Соловьев 1985: 22, 70, 109-113）。これらの都城内部にある単独の祠堂については、出家者たちが関与した本来の仏教寺院というよりは、都市民が参拝や寄進といったより簡便な形で信仰を表明する場所として機能していた可能性が高い。

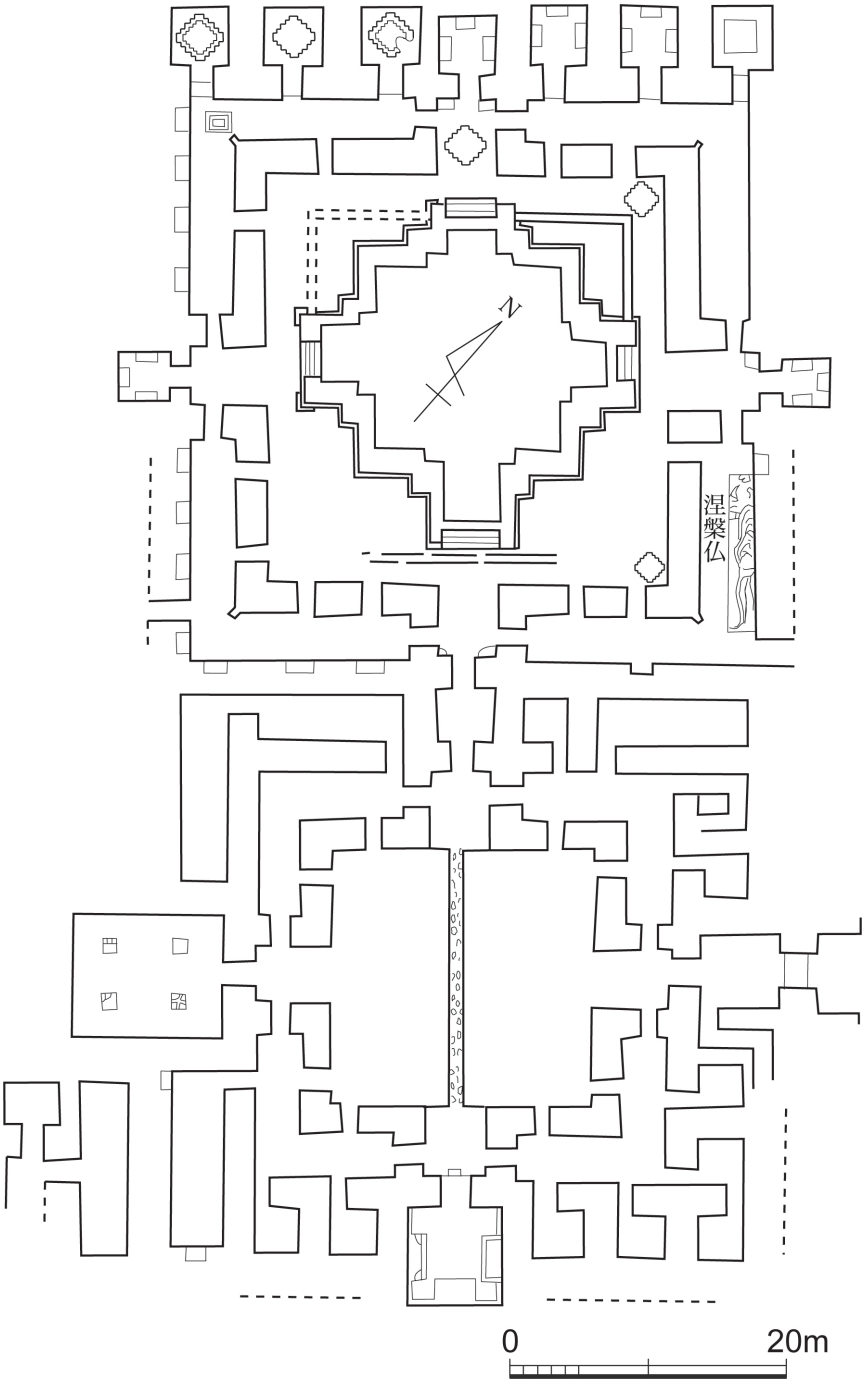


図15. アジナ・テパの伽藍配置（Litvinskij and Zejmal' 2004、Fig. 3 を再トレース）

Ⅳ．チュー川流域の仏教寺院

チュー川流域で都城址や仏教寺院址が分布するのは、イシク・クル湖の北西方面で、古くはセミレチエと呼ばれていた地域の南部にあたる。当該地域の仏教寺院は早くとも６世紀以降のものと考えられ、唐の勢力が進出する７～８世紀にも継続していた。各遺跡の概要はすでに林および加藤によって概ね示されているので（林 1996; 2017; 加藤 1997: 121-184）、ここでは、その伽藍配置の特徴を紹介するにとどめる。

クラスナヤ・レーチカは、６世紀頃にソグド人によって建設された都市と考えられ、３つの仏教寺院址が確認されている。第１仏教寺院址（または単に僧院と呼ばれる）は、シャフリスタンの壁外南方にあり、仏教的な壁画の断片が出土したことから寺院

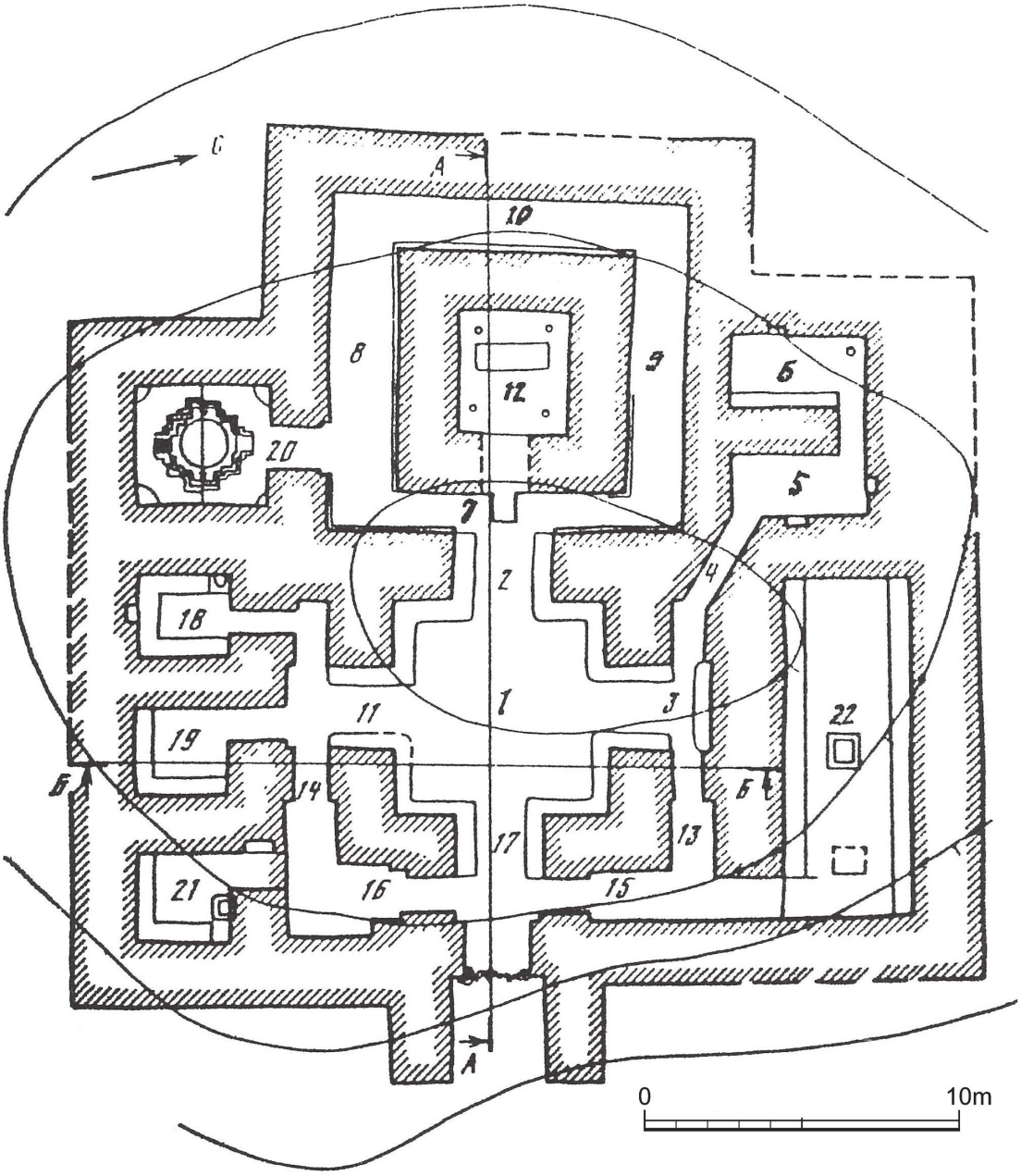


図16. ヒシュト・テパの寺院（加藤 1997、図 2-88 を一部改変）

址と推定されている。二重の壁で囲まれた内陣を持つ回字形の祠堂部分、それとつながっている小部屋、そして壁で隔てられた広間からなっているが、全体のプランは不明である。塑像断片等の出土はなく、発掘者のコジェミャコはマニ教寺院であった可能性について言及しているという（加藤 1997: 179）。

第 2 仏教寺院址は壁外の南東約 500m の地点に所在し、復元長 12m の涅槃仏が出土したことで知られている（図17）。2 層にわたる建築期があるが、プランは共通しており、二重の壁に囲まれた内陣を持つ回字形祠堂である。内陣は東に向いて入口が設けられており、涅槃仏は外側をめぐる回廊の西側部分で、内陣と接する壁に背を向ける形で安置されていた。内陣では、大型の塑像断片、銅造の観音菩薩立像（高 6.7cm）、壁画断片、ブラーフミー文字の経典断片などが出土しており、寺院の主要な礼拝対象が仏像であったことは明らかである。なお、近傍でストゥーパ址と思われる遺構は確認されていない。

第 3 仏教寺院址は2010年に新たに発見された遺構である。方形室の奥壁の龕から塑造の坐仏像下部が

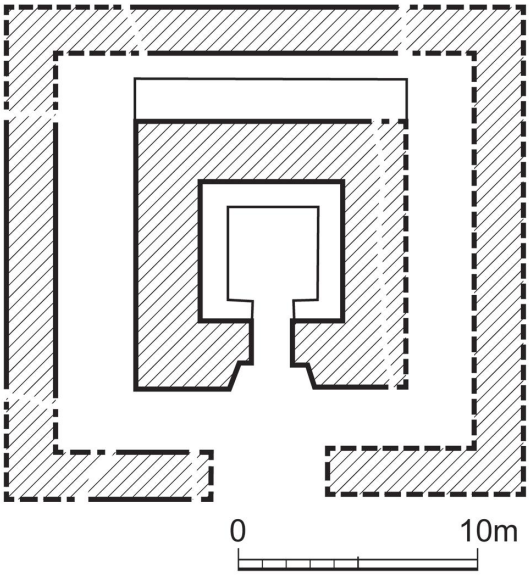


図17. クラスナヤ・レーチカ第２仏教寺院址（第１建築期）（加藤 1997、図6-43 を再トレース）

出土し、他にも立像の足部などが出土していることから、仏教祠堂であった可能性が高いが、平面プランの全貌は不明である。

続いて、古くはスイヤブと呼ばれた都市であったアク・ベシム都城址から、３つの仏教寺院が発見されている。第１仏教寺院址は都城の壁外にあり、チタデルの南西約 100m の地点に位置する。約 76m × 22m の長方形の平面プランで、いくつかの部屋がある入口部分、広い中庭、奥の祠堂部分とからなっている（図18）。大型のストゥーパや僧房の存在については報告されておらず、この祠堂を含む建物が寺院の主要部と考えて問題なかろう。中庭の奥にある祠堂部は、列柱のある前室を持ち、内陣が二重の壁で囲まれた回字形である。内陣への入口の左右には大型の塑像が安置されており、その一部が発掘されている。内陣の床面中央には深さ 1m の長方形の穴が作られていることから、ここにストゥーパが安置されていたとは考えられず、やはり何らかの尊像が礼拝対象だったのだろう（Кызласов 2006）。

アク・ベシムの第２仏教寺院址（Зяблин 1961）も城壁外にあり、シャフリスタンの南門の南東約 100m の地点に位置する。現状で報告されているのは狭い前室を持つ約 38m 四方の祠堂で、その内陣は三重の壁で囲まれており、結果的に回廊が二重になっている（図19）。さらに特徴的なのは、この内陣の平面プランが十字形になることで、入口が開口する北側以外の壁には、必然的に龕ができることになる。この周辺からは塑像の断片が出土していることから、やはり礼拝対象は仏像であったことがわかる。

もうひとつの寺院址については、いわゆるラバド地区で発見されており、出土品には中国の強い影響が認められる。ただし、寺院の平面プランは明らかになっていない（加藤 1997: 147-148）。

Ⅴ．伽藍配置の変遷

以上のように、中央アジアの仏教寺院においては、ガンダーラの寺院から基本的な伽藍配置を継承する一方で、各地で独自の配置も認められた。その変遷を、以下で簡単にまとめておきたい。

まずガンダーラにおいて、寺院のもっとも重要な施設であり礼拝対象であったのは、ストゥーパである。その伝統は特に、トハーリスターンにおいて当初から継承されていることが、クシャーン朝期から機能していたカラ・テパやファヤズ・テパなどから判明する。僧房と思われる建造物が直近に存在する

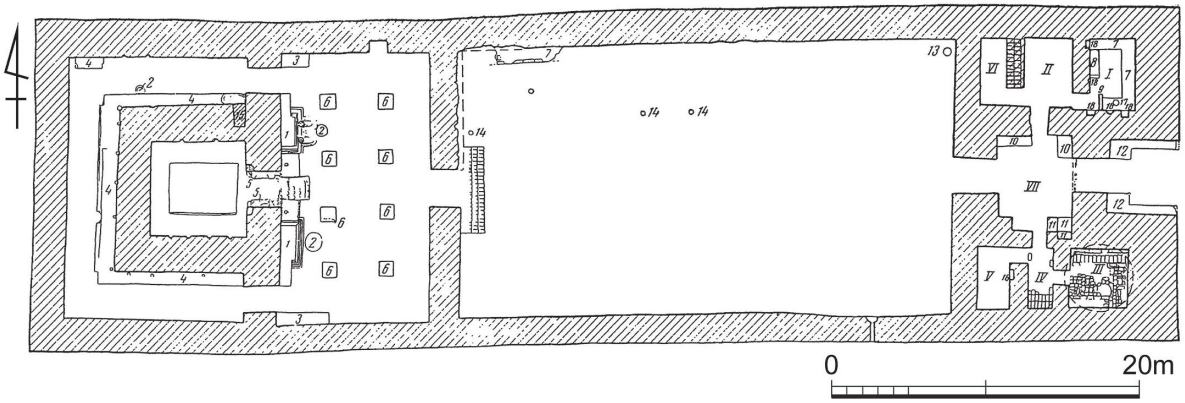


図18. アク・ベシム第１仏教寺院址（加藤 1997、図6-21 を一部改変）

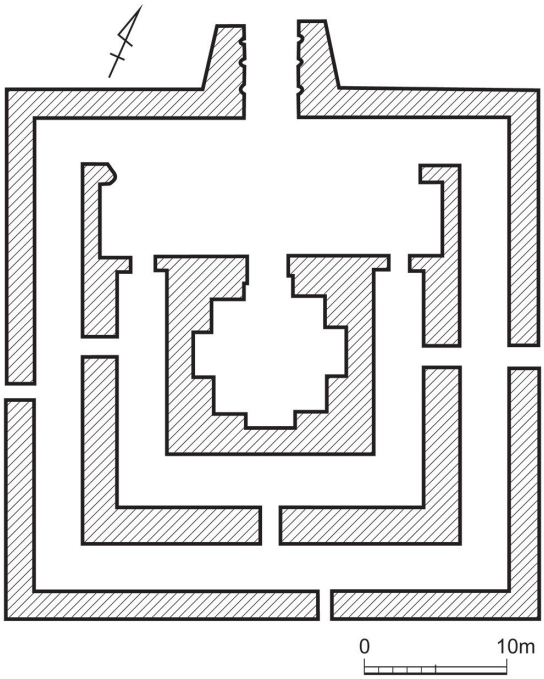


図19. アク・ベシム第２仏教寺院址
（Зяблин 1961、рис. 1 を再トレース）

ことも、ガンダーラとトハーリスターンの共通点である。タリム盆地においては、確実にクシャーン朝期に遡れる遺構が発見されていないため比較は難しいが、ミーラン遺跡で３～４世紀とされる寺院は、大型の方形基壇ストゥーパの周囲に単独の祠堂を配し、その内部にもストゥーパが祀られていた。

このように、ストゥーパが寺院の中心となる伝統は、中央アジアにおいても７～８世紀までは確実に存続している。タリム盆地においては、ラワク、トックズ・サライ、スバシなど、南道・北道を問わず多数の寺院で大型ストゥーパが存在し、多くの場合、その周囲に祠堂や僧房と思われる建造物が一定のグループを形成しながら散在するという配置になる。トハーリスターンにおいてもカラ・テパ北丘の寺院やウシュトゥルムッロ、アジナ・テパなどに伝統の確かな継続を見出すことが可能で、これらの寺院ではストゥーパに方形僧房が隣接する点でも大ガンダーラ（特にタキシラ地域）の特徴を引き継いでいる。

一方で、ガンダーラに認められる多数の奉献小塔や、小塔・仏像等を安置するための小型の祠堂を連ねる「祠堂列」は、中央アジア全体を通じて非常に少ない。寺院の中心である大型ストゥーパ（主塔）の周囲を小祠堂で囲む「塔院」が形成される寺院は５世紀以降の例のみで、カラ・テパ北丘、アジナ・テパ、そしてトックズ・サライがそれに当たる。ガンダーラのように奉献小塔が林立するような伽藍配置にいたっては、管見の限り皆無である。

小祠堂が連なる祠堂列や奉献小塔に代わって、中央アジアの寺院において重要な役割を担っているのは、小祠堂よりも大型の独立した祠堂建築で、平面プランが回字形になる例が多い。特にタリム盆地でその傾向が顕著で、ミンオイのように仏像を祀った祠堂ばかりが散在し、ストゥーパがほぼ認められない寺院址も存在している。また、ニヤでは数 km 離れて存在するストゥーパが見通せる位置に僧房や単独の祠堂が配置されていた。ダンダン・ウィリクでもこれと同じような配置であった可能性がある。これはあるいは、ストゥーパがより象徴的な礼拝対象となり、日常的で身近な礼拝対象としては、仏像がその中心となっていることを示しているのかもしれない。ただしそれでも、大型のストゥーパを持つ寺院とそれを持たない寺院の違いが、何に由来するのかは不明と言わざるを得ない。

トハーリスターンにおいては、クシャーン朝期のアイルタムが単独祠堂とストゥーパを並立させる構成であるが、祠堂内部に祀られるのはストゥーパであった。６世紀以降になるとヒシュト・テパのようにストゥーパよりも祠堂が伽藍配置の中心を占めているような事例が登場し、しかもこの祠堂に祀られていたのは仏像であった。さらに、カライ・カフィルニガンにあった仏堂のように、ストゥーパを一切伴わない単独の祠堂も存在しているが、ダルヴェルジン・テパの第２仏教寺院址などと同様、都城の内部に建立された寺院については先述のとおり別の事情が介在している可能性もあるため、一概にストゥーパの有無を問題とするのは適切ではないかもしれない。

こうしたおおまかな変遷の先端に位置づけられるのが、チュー川流域の諸寺院であろう。この地域では、確実にストゥーパと断言できる遺構がこれまでは発見されておらず[7]、単独の祠堂から仏像・仏画の断片が出土するのみである。その祠堂の平面プランは、二重（または三重）の壁で囲まれた内陣を持つ回字形で、アク・ベシム第１仏教寺院址のように、広い中庭を持つ場合もある。中庭を持つ平面プランは、トルファン高昌故城の γ 寺院やＡ寺院（図11）に酷似しており、方柱状のストゥーパが回字形の祠堂に替わっているということになる。礼拝対象がス

トゥーパから仏像へと変化していくという事実は、仏教が信仰されていた各地域において指摘されているところであるが、それでも８世紀頃までのインド・ガンダーラ・中央アジア各地では、上述のとおり寺院におけるもっとも重要な施設はストゥーパであり続けた。都城内に建立された小仏堂を別にすれば、ストゥーパが近傍に一切存在しない寺院は、ミンオイなどごく一部に限られる。にもかかわらず、周辺地域からの影響を受けて成立したはずのチュー川流域の仏教寺院で、ストゥーパが現状では見いだされていない（あるいは極端に少い）ことは特異な現象である。この点からは、タリム盆地内で多く認められる単独祠堂中心の伽藍配置に加え、トルファンで典型的であった広い中庭を持つ長方形プランの伽藍配置が、チュー川流域の仏教寺院の成立に影響していると考えることも可能であろう。そして、もう１点考慮しなければならないのは、中心となる祠堂が、二重（または三重）の壁で囲まれた内陣を持つことである。以下では、この種の祠堂について簡単に考察しておきたい。

Ⅵ．二重の壁で囲まれた内陣を持つ回字形祠堂

上述のとおり、チュー川流域の仏教寺院址の多くがこの形態の祠堂を伴っている。ガンダーラおよび中央アジアにおいて源流となるプランを探ると、実はかなりの例が存在している。そもそも、この建築様式はアケメネス朝期の拝火神殿にすでに採用されており、中央アジアの祠堂およびその他の建築との類似性は古くから指摘されてきた（Yamamoto1979; Pugachenkova 1991/92: 29-30; 加藤 1997: 187-189; Rhie 2002: 571-573; Кызласов 2006: 270-275）。　まず、大ガンダーラ地域においては、タキシラのダルマラージカーＨ祠堂、ジャンディアールＣ寺院およびモフラ・マリアラーン寺院がよく似たプランを取っている（Marshall 1951; Behrendt 2004: 67-69）。しかし、これらはタキシラの諸寺院・祠堂の中ではかなり異質な存在であり、同系統のプランが継続的に採用されているわけではない（桑山 1990: 14-15）。また、スワート渓谷においてもこの平面形の祠堂は存在しており、ブトカラＩ寺院において重要な位置を占めるいわゆる "Great Building" がその典型である（Behrendt 2004: 100-101）。さらに、同じくスワートのバリコト地域に所在するグンバッ

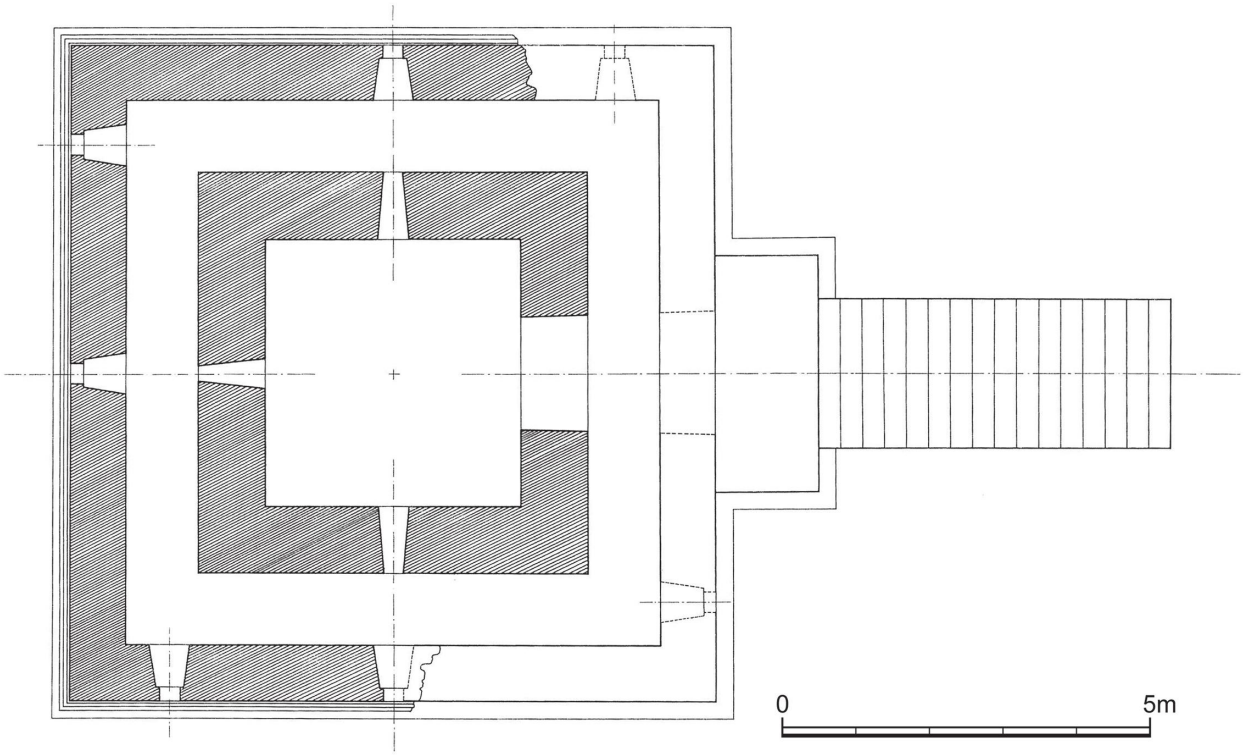


図20．グンバット寺院の祠堂（Faccenna and Spagnesi 2014、Fig. 485 を一部改変）

ト寺院の祠堂（図20）は、明確にこのプランを有している（Faccenna and Spagnesi 2014: 465-502）。これらの大ガンダーラ地域の祠堂は、石積みの方法や出土貨幣などから遅くともクシャーン朝期には建設されていた可能性が高い。

同様のプランの祠堂は、トハーリスターンではさらに古い段階から知られている。タフティ・サンギーンのオクサス神殿は、前４～前３世紀頃の建築で、少なくともグレコ・バクトリア時代までにこの建築様式がこの地に導入されていることがわかる（Litvinskii and Pichikian 1994）。アイルタムでは下層遺構がこのタイプの神殿址（Pugachenkova 1991/92）であり、この神殿が放棄されたあとに造営されたクシャーン朝期の仏教寺院にも、似たプランの祠堂があったことは上述のとおりである。仏教寺院以外にも、スルフ・コータルの神殿 A・B・D（図21）がこのタイプで（Schlumberger et al. 1983）、年代は判然としないものの、ディルベルジン・テペのいわゆるディオスクリ神殿が比較的近い形態をとる（Кругликова 1986）。このように、二重の回廊に囲まれた内陣を持つ祠堂は、トハーリスターンの中で長い伝統として引き継がれる重要な平面プランであると思われる。

タリム盆地では、上述のとおりクチャを除く各地で非常に多くの事例を確認することができる。このうち、もっとも古いと考えられるのはニヤの遺構であるが（３～４世紀頃）、同時代と考えられるミーラン遺跡からは回字形祠堂が発見されていない。む

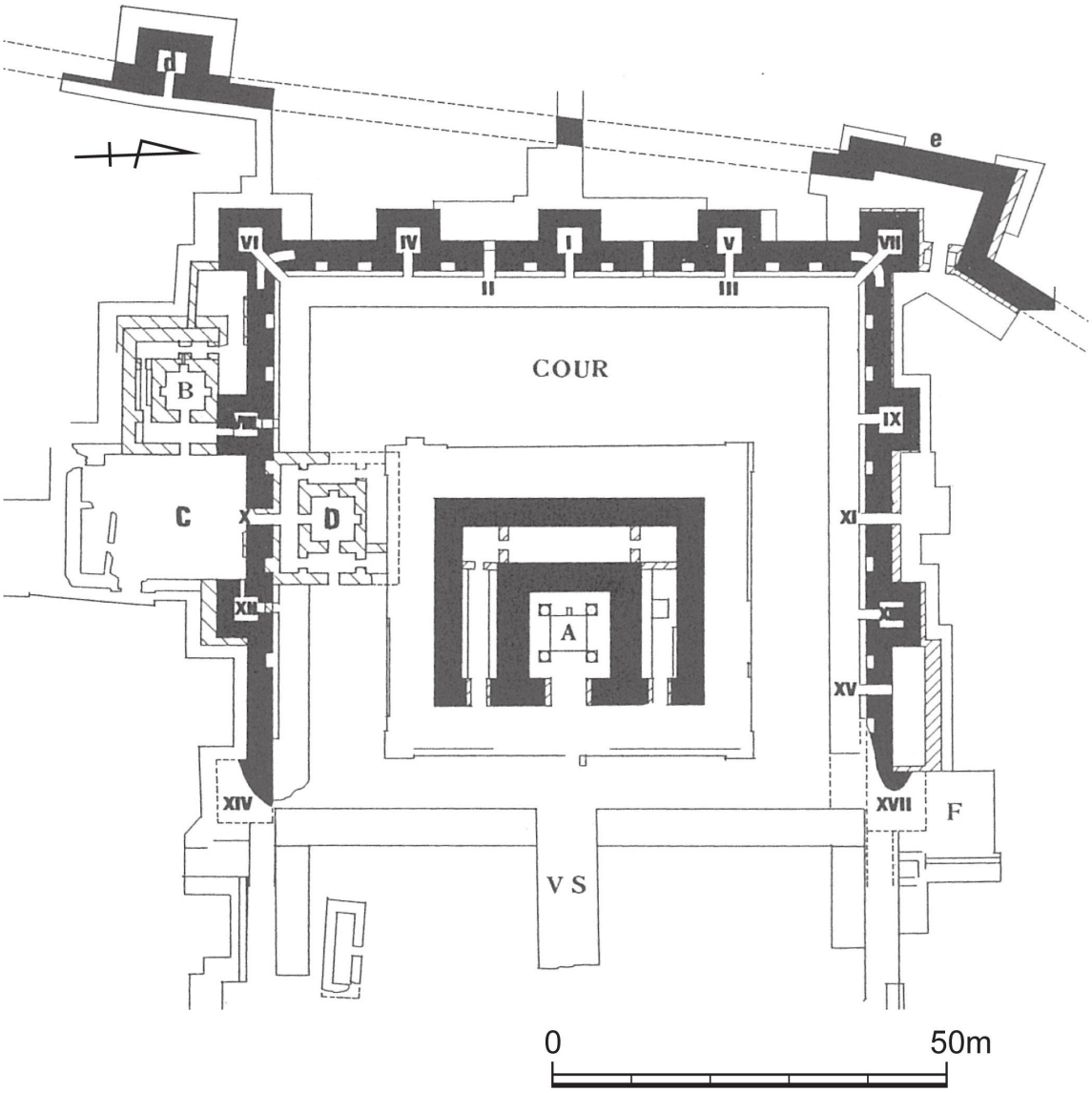


図21．スルフ・コータルの神殿部分（Schlumberger et al. 1983、Pl. IV を一部改変）

しろ５世紀以降に、仏像を祀るための建物として回字形祠堂がタリム盆地内で発展することを考慮すると、４世紀から５世紀にかけてトハーリスターンとタリム盆地の間の文化交流が盛んとなり、トハーリスターンの伝統的なプランが積極的に導入された可能性が考えられる[8)]。そしてタリム盆地においては、こうした祠堂が伽藍の構成要素というよりは、むしろ単独で（つまりストゥーパなしで）寺院として機能していると捉えられる例（ダンダン・ウィリクやミンオイなど）も登場してくるのである（中村・岡崎 2018）。このように現状では、タリム盆地内で４～５世紀以降に優勢となりつつあった、仏像を祀る回字形祠堂が単独で寺院となる構成が、６世紀以降にチュー川流域の仏教寺院の成立に大きく関与しているように見える。

今後の展望

中央アジア各地の地上寺院の伽藍配置を概略的に比較した結果、チュー川流域の仏教寺院の伽藍配置（ストゥーパがなく、回字形祠堂が単独で寺院を構成する）は、タリム盆地の文化の影響を強く受けている可能性が指摘できた。この結果は、唐代にこの場所に安西都護府の四鎮のひとつである砕葉鎮城が設置されたことを考慮すれば当然のことで、これまでも長く指摘されてきたことである。さらに近年は、帝京大学とキルギス共和国国立科学アカデミーによるアク・ベシム遺跡の調査において中国式の瓦が大量に出土したほか、外壁に版築技法が使用されていることが判明するなど、中国文化の浸透がかなり具体的に明らかになりつつある（山内・アマンバエヴァ 2017）。

一方、トハーリスターンで一貫して伽藍配置の中心となり、タリム盆地でも基本的には存在している大型のストゥーパが、チュー川流域で見いだされない理由は不明のままである。今後、その理由や３地域の仏教寺院の関係をより明確にするためには、新たな発掘調査が必要となる。中でもアク・ベシム第２仏教寺院址においては、コロナ衛星画像と 1967 年の航空写真の分析によって、既掘の寺院遺構の隣にこれまでまったく報告されていない方形の建物跡が存在していた可能性が高まっている（山内・アマンバエヴァ 2017）。この地点を発掘することによって、新たにストゥーパや僧房などの痕跡が発見されれば、チュー川流域とトハーリスターンとの関係を再度検討するための材料となるだろう。また、クラスナヤ・レーチカに所在する大型マウンド（註７参照）についても再考の余地があり、そうした新しい情報に基づいて当該地域の仏教寺院の年代と伽藍配置の変遷を改めて検討してくことが必要になる。

註

１）本稿では、いわゆる中央アジア５か国に加え、アフガニスタン北部と中国の新疆ウイグル自治区を含む地域を漠然と指す用語として用いている。

２）アム川の上・中流域両岸地帯の古名で、古くはバクトリアと呼ばれた地域。近年、クシャーン朝のカニシュカ王の治世にはすでにトハーリスターンという名称で呼ばれていたことを示す銘文が発見されたことから（Sims-Williams 2015）、本稿ではこの名称で統一する。

３）この３分類は、あくまで本稿における分析を促進するための作業仮説として設定したものであり、各地域における実際の仏教のあり方について解明が進むことで、自ずと解体されるものと考えている。

４）本稿では、石窟寺院の平面プランやその配置については言及しない。また、地上寺院については、そこに所在する建造物のおおまかな種類と配置を検討するのみとし、各建造物の技術的細部には立ち入らない。すなわち、ストゥーパ基壇の形態や祠堂の天井の形態などについての議論は基本的に捨象した。

５）こうしたホータン周辺の、時代の降る仏教については、カシュミール地域との関係を考慮に入れる必要がある。この点については稿を改めたい。

６）これらの祠堂が２世紀まで遡るとの見解もあるが、ここでは出土塑像の様式から判断して（宮治 1991）、多くが７世紀頃に属すると考えておきたい。

７）ただし、クラスナヤ・レーチカの壁外西側にある「ゾロアスター教関係の施設」とされる遺構は、現状でも丈高く残存しており、ストゥーパであった可能性が十分に考えられる。先述の第３仏教寺院址がこのマウンドの直近で検出されていることからも、今後の検討が必要である。

８）４世紀後半に一時的にトハーリスターンの仏教が衰退した理由が、ガンダーラ地域との交易路の不通（岩井 2013: 408-406）であったとすれば、この時期にトハーリスターン地域の仏僧がタリム盆地へと流入している可能性は十分考えられる。ただし、現状では物証が一切存在しない。

文献

池上悟編　2017『カラ・テパ遺跡― 2016年度調査概要報告書』立正大学ウズベキスタン学術調査隊

池上悟編　2018『カラ・テパ遺跡― 2017年度調査概要報告書』

立正大学ウズベキスタン学術調査隊
伊藤玄三　2002「カラドン遺跡の仏教寺院」『法政大学文学部紀要』48、93-119.
岩井俊平　2006「アフガニスタンおよび周辺地域の仏教寺院の変遷」『佛教藝術』289, 100-112.
岩井俊平　2013「バクトリアにおける仏教寺院の一時的衰退」『東方学報』88, 422-403.
加藤九祚　1997『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』シルクロード学研究４　シルクロード学研究センター
加藤九祚編　2002『ウズベキスタン考古学新発見』東方出版
桑山正進　1990『カービシー・ガンダーラ史研究』京都大学人文科学研究所
シャキル・ピダエフ（加藤九祚訳）　2001「ザール・テパ都城址」『アイハヌム』2001, 27-44.
シャキル・ピダエフ・加藤九祚　2007「カラテパ北丘・西（中）丘の発掘（1998-2007）」『アイハヌム』2007, 59-131.
創価大学シルクロード学術調査団編　1996『ダルヴェルジンテパ DT25』ウズベク共和国文化省ハムザ記念芸術学研究所・創価大学
創価大学シルクロード研究センター編　2012『ダルヴェルジンテパ仏教寺院址』ウズベキスタン共和国科学アカデミー芸術学研究所・創価大学シルクロード研究センター
中日／日中共同ニヤ遺跡学術調査隊編　1999『中日／日中共同 尼雅遺跡学術調査報告書』第２巻
日中共同ダンダンウイリク遺跡学術調査隊編　2007『日中／中日共同 丹丹烏里克遺跡学術調査報告書』
中村優花・岡崎甚幸　2018「中央アジア仏教寺院における祠堂建築の空間構成の類型：礼拝対象物の配置に着目して」『日本建築学会計画系論文集』第83巻, 第754号、2441-2451.
林俊雄　1996「天山北麓の仏教遺跡」創価大学シルクロード学術調査団編　1996『ダルヴェルジンテパ DT25』ウズベク共和国文化省ハムザ記念芸術学研究所・創価大学、pp. 154-178.
林俊雄　2017「クラスナヤ・レチカ Krasnaya Rechka 遺跡の仏教遺跡」『2016年度 中央アジア遺跡調査報告会資料集』pp.39-53.
宮治昭　1991「西域の仏教遺跡と彫塑美術」『ドイツ・トゥルファン探検隊　西域美術展』朝日新聞社、pp. 29-40.
山内和也、バキット・アマンバエヴァ　2017「帝京大学シルクロード学術調査団による2017年度アク・ベシム遺跡調査」『2017年度 シルクロード学研究会資料集』pp.27-46.
マリアンネ・ヤルディッツ　1991「序論　西域の歴史と美術」『ドイツ・トゥルファン探検隊　西域美術展』朝日新聞社、pp. 9-20.
Альбаум, Л. И. (1974) Раскопки Буддийского Комплекса Фаяз-Тепе (По Материалам 1968-1972 гг.). In: В. М. Массон (ред.), *Древняя Бактрия. Предварительные Сообщения об Археологических Работах на Юге Узбекистана*. Ленинград, pp. 53-58.
Behrendt, K. (2004) *The Buddhist Architecture of Gandhara*. Leiden-Boston.
Behrendt, K. (2006) Relic Shrines of Gandhara: A Reinterpretation of the Archaeological Evidence. In: Brancaccio, P. and Behrendt, K. (eds.) , *Gandharan Buddhism: Archaeology, Art, Texts*. Vancouve, pp. 83-103.
Faccenna, D. and Spagnesi, P. (2014) *Buddhist Architecture in the Swat Valley, Pakistan. Stupas, Viharas, a Dwelling Unit*. Lahore.
Fussman, G. (2011) *Monuments Bouddhiques de Termez I*. Paris.
Hambis, L. (ed.) (1967) *Douldour-Âqour et Soubachi*. Mission Paul Pelliot III (Planche), Paris.
Кругликова, И. Т. (1986) *Дильберджин. Храм Диоскров*. Москва.
Кругликова, И. Т. и Пугаченкова, Г. А. (1977) *Дильберджин*. Часть 2, Москва.
Кызласов, Л. Р. (2006) *Городская Цивилизация Срединной и Северной Азии*. Москва.
Литвинский, Б. А. и Соловьев, В. С. (1985) *Средневековая Культура Тохаристана*. Москва.
Литвинский, Б. А. и Зеймаль, Т. И. (1971) *Аджина-Тепа: Архитектура, Живопись, Скульптура*. Москва.
Litvinskij, B. A. and Pichikian, I. R. (1994). The Hellenistic Architecture and Art of the Temple of the Oxus. *Bulletin of the Asia Institute*, 8, 47-66.
Litvinskij, B. A. and Zejmal', T. I. (2004). *The Buddhist Monastery of Ajina Tepa, Tajikistan: History and Art of Buddhism in Central Asia*. Rome.
Marshall, J. 1951. *Taxila*. 3Vols, Cambridge.
Paul-David, M., Hallade, M. et Hambis, L. (1961-64) *Toumchouq*. Mission Paul Pelliot II, 2 vols, Paris.
Pugachenkova, G. A. (1991/92) The Buddhist Monuments of Airtam. *Silk Road Art and Archaeology,* 2, 23-41.
Rhie, M. M. (1999) *Early Buddhist Art of China and Central Asia,* vol. 1. Leiden-Boston-Köln.
Rhie, M. M. (2002) *Early Buddhist Art of China and Central Asia,* vol. 2. 2vols, Leiden-Boston-Köln.
Schlumberger, D., Le Berre, M., et Fussmann, G. (1983) *Surkh Kotal en Bactriane I*. MDAFA tome25. Paris.
Sims-Williams, N. (2015) A new Bactrian inscription from the time of Kanishka. In: Falk, H. (ed.) *Kushan Histories,* Bremen, pp.256-264.
Ставиский, Б. Я. (ред.) (1975) *Новые Находки на Кара-Тепе в Старом Термезе*. Москва.
Ставиский, Б. Я. (ред.) (1996) *Буддийские Комплексы Кара-Тепе в Старом Термезе*. Москва.
Stein, M. A. (1907) *Ancient Khotan: detailed report of archaeological explorations in Chinese Turkestan*. 2vols, Oxford.
Stein, M. A. (1921) *Serindia: detailed report of explorations in*

Central Asia and westernmost China. 5 vols, Oxford.

Yamamoto, Y. (1979) The Zoroastrian Temple Cult of Fire in Archaeology and Literature (I). *ORIENT*, XV, 19-53, Pls. 1-55.

Zeymal, T. I. (1999) On the Chronology of the Buddhist Site of Kara-Tepe. In: M. Alram and D. Klimburg-Salter (ed.), *Coins, Art and Chronology. Essays on the pre-Islamic History of the Indo-Iranian Borderlands,* Wien, pp. 413-421.

Зяблин, Л. (1961) *Второй Буддийский Храм Ак-Бешимского Городища*. Фрунзе.